

日長ひとゑご

齊藤

27

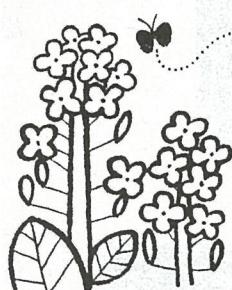
讓

今年は、いつになく春の訪
れが早い。道端や土手の日溜
りには、いぬふぐりやはこべ
などの小さな可憐な花が、柴
や白い絨毯を敷き、わが家の
猫の額ほどの庭にも、春は足
音高くやってきて、疎な草木
に赤や黄色の鮮かな花を咲か
せている。時折、うぐいすの
囁りが、弥生三月の春霞の空
にこだまし、山里は早くも春
うららである。町長室に飾ら
れる花も、温室育ちの切り花
から、庭先に咲く水仙や白蓮、
雪柳にかわり、春の彩りと香
りを漂わせている。

今年は、昭和天皇の崩御にはじまって、大小様ざまな行事が催され、その間に新年度予算の編成や、町議会をはじめ数々の会議が重なったり、町内外の葬祭やらで、息つく暇がないほど多忙な日々が続いている。健康だけが取れの私ではあるが、此の頃いささか疲労を感じていた。けれども、自然が運んできた春の恵が、こんな私の心や体の疲れを、穏やかに癒してくれるような心地がする。いま、自分は、自然の大きな懷に抱かれているという実感が、無上に心のやすらぎと充実感を与えてくれるのである。自然は、人間のように感情を持つ

るとき、人間は神が支配する
大自然の中で、生かしていた
だいているのだという謙虚な
気持ちが満ちてくる。自然と
思議である。

物質文明の発達は、いつし
か人間から、自然を愛し、敬
う心を奪いとつてしまつたよ
うだ。現代人は、いま科学技
術の進歩によつて、あたかも
自然を克服し、支配できるか
の如き錯覚に慢心し、身勝手
で無秩序な自然破壊をくり返



春うらら

き出しにしたり、たわい無いことでいがみあう人間の姿ほど醜く、軽薄なものはない。きっと、自然を支配する神の目からみれば、それは塵芥以外の何物でもあるまい。

いま、やわらかに降りそぞぐ春の日差は、私達人間に「自然の中で生かされてゐる恩恵を思い知れ」と問いかけているようである。春のどかさは、冬の厳しさをくぐり抜けることによつて強調され、春の花の清潔さと艶かさは、くすんだ冬枯れの残像の中で映える。これと同じように、人間の楽しみや喜びも、苦難や悲しみを乗り越えてこそ得られるものである。私は、結婚式で回つてくる免

求めようとする風調があり、
残念なことである。こんな彼
等こそが、人生の敗者、社会
の落伍者となつていくことは
間違いあるまい。こんな情な
い姿をみるにつけ、思い出さ
れるのは、佐藤一齋が、言志
晩録で語る「三学」のことだ
ある。
少くして学べば壮にして
爲すあり。

こともなく、またこれに支配されることがない。しかし、自然は四季の移ろいとともに、躍動、苛烈、感傷、峻厳などで、鮮明にその姿を変える。自然の無きゆういとな

している。何と愚なことであらうか。しゃせん所詮、人間の知恵がつくりだした文明や文化は、限りなく小さくそして軽い。無限な自然いつくしみを忘り、決して

紙には、極まって「人生は四季の如し」と書くことにしてゐる。この春には、また多くの若者達が、学校や社会へと巣立っていく。ともすれば、これらの若者の中には、義